

令和5年度 自己評価 及び 施設関係者評価

令和6年2月
幼保連携型認定新通こども園

- ・「自己評価」：園の教職員がつけた評価
- ・「施設関係者評価」：関係者評価委員会がつけた評価
- ・評価基準 A：よくできている B：概ねできている C：あまりできていない D：できていない

領域	NO	評価項目	自己 評価	自己評価についての園の説明	関係者 評価	関係者評価委員会の説明
組織運営	1	特色ある園づくりを目指し、職員が協力し合う体制を作っている。	B	時代に応じた教育・保育を模索しながら、「援助型保育」や「インクルーシブ保育」などの保育形態を採用し、職員間での研修や会議を通じて保育方法を常に見直しています。 子どもの興味に合わせた遊びを重視し、毎月のクラス会議で話し合いながら保育に取り組んでおり、新しい保育情報を取り入れ続ける姿勢を目指しています。 しかし、園の特色や方向性に関しては、全員が一致して同じ目標に進む体制には課題があります。		
	2	子どもや園の実態、保護者や地域の意見・要望等を踏まえて教育目標を設定し、重点化された中・短期の目標が示されている。	B	運営の保育者を中心に「子どもや園の実態」に合わせて年間計画や教育目標を柔軟に更新しており、日々の保育はこれらの計画に基づいて実施されています。 しかし、保護者や地域の方々からの意見や要望がどの程度取り入れられているかを検討する必要があります。		

	3	事故やトラブルに対して、組織的、迅速に対応できる体制を整えている。	B	複数園での勤務経験を持つ職員も認めるように、事故やケガが発生した際の対応は組織的かつ迅速であり、保護者への伝達や職員へのフィードバックも滞りなく行われています。 事故防止のための話し合いが設けられ、必要に応じて看護師への対応も求められています。 ただし、棟が異なる場合の情報共有には難しさがあることが課題です。		
	4	働き方改革、ハラスメント、職務規律を意識して、職員の勤務体制・意識の改善を図っている。	C	日々働きやすい労務環境を目指して改善に努めています。業務分担を明確することにより、上下関係の軽減にも繋がり相談しやすい環が整ってきています。 しかし、正規職員間での業務量の差や人手不足による業務負担の増加が課題として残っています。 働き方改革の考え方は浸透しつつありますが、業務量の軽減には至っておらず、不慮の事故や病気で勤務体制の変更が必要になることもあります。		

	5	管理職の明確なリーダーシップのもと、保育者が生き生きと働いている。	B	保育者が子どもの最善の利益のために能動的に保育を行えるよう、リーダーシップを発揮して助言や指導を行っています。主幹や副園長への相談がしやすくなっているものの、人員不足による現場の負担は依然として大きいと考えます。 運営会議を通じて管理職間での情報共有が進んでおり、園内での取り組みや保育について職員間での理解が深まり、子どもの育ちを支援する時間や機会が増えています。 職員一人ひとりへの配慮が感じられるとの声が聞かれるようになりましたが、仕事分担や報告義務について、職員が判断しにくい課題があります。		
	6	園の財務運営状況が適切に公開されている。	C	財務運営情報はホームページに公開されていますが、職員の間での周知や関心は不足しています。		
教育課程・保育	7	保育者は、個々の成長に向け、子どもが楽しく工夫した保育を行っている。	B	保育者は個々の創意工夫を発揮し、子どもが主体的に楽しめる環境を整えるために努力しています。子どもの興味・関心を基にした活動計画を立て、クラス会議を通じて子どものことを深く理解し、共有する時間が増えました。 また、肯定的な視点で子どもを見て温かい保育を目指し、休憩時間や月一回の会議を利用して子どもの成長について話し合い、遊びや環境作りに取り組んでいます。		

	8	教育目標の具現化を目指し、教育課程を編成・実践・評価し教育活動の充実・改善を図っている。	C	教育課程と指導計画は、上意下達ではなく、現場の意見を踏まえて定期的に見直されています。しかし、日々の業務の忙しさから計画の立案が遅れることもあり、昨年度に引き続き同様の遅れが発生しています。 ICT の活用により実践の振り返りが写真を用いて記録されています。 年間指導計画は日々の記録や遊びの計画に活用されており、子どもの姿からのフィードバックを基に内容の追加や変更が行われています。 しかし、業務の多さや時間の不足により、振り返りの時間が十分に取れていない状況です。		
	9	豊かな心の育成を目指し教育活動を行っている。	B	仏教の教えと豊かな自然環境を背景に、心の安定と自己充実を目指した保育を実践しています。絵本の読み聞かせや日本の伝統文化への触れ合いを重視しています。 保育者の力量や意識によって保育内容が左右されていることもあります。月刊本を利用して家庭と園で絵本を共有していますが、貸出図書の利用は少ない状況です。		

	10	子どもは、安定した気持ちで生活し、園生活を楽しんでいる。	B	日々の生活や行事は子どもの発達と興味に合わせて無理のない参加を検討し、楽しめるよう工夫しています。 安心できる日常生活を重視し、職員は子どもとの安定した関わりを心がけ、健康や体調の変化に柔軟に対応しています。 行事については見直しの必要性があり、一人一人の育ちに合わせて保護者の方と一緒に考えていく必要があると考えています。		
	11	子どもは、自身の興味関心の即した遊びに没頭し、深い学びを得ている。	B	子どもが主体となる保育環境を創出するように心がけています。保育環境は、子どもの遊びが保障され、興味に合わせて環境や玩具を調整し、没頭できる空間を提供することに重きを置いています。 また、大人は子どもの遊びを発展させるための積極的な関わりを心がけています。子どもの発達と興味に応じて、絵本を通じて世界観を広げ、豊かな体験を楽しめるように努めています。		
	12	日々の記録が次の保育に活かされ、園の計画に反映されている。	C	日々のドキュメンテーションを通じて子どもの姿を捉え、振り返りに活用しています。しかし、園の計画との系統性に課題があり、計画が遅れることもあります。 日々の記録には子どもの活動だけでなく、行事や避難訓練の反省も含め、次回の改善に活かすことを目指しています。個人の振り返りは行われているものの、クラス全体での振り返りは不十分である点も課題として挙げられています。子どもの発達に合わせた計画に変更していく必要性があります。		

資質の向上	13	保育者の指導力向上に計画的・組織的に取り組んでいる。	B	子どもの心に寄り添うために、専門性を基に組織的な支援を実現しています。外部講師からの研修や園内研修に積極的に取り組み、リーダー会を通じて職員が司会や会議運営の経験を積む機会を設けました。 保育者の指導力向上を目的とした研修は計画的に実施され、ICT の導入を含む多様なテーマで充実していました。 外部研修の機会も提供され、継続的な学びに焦点が絞られており、職員が取り組み方を考えるきっかけになっています。		
	14	個々の保育者が資質向上のために研究に研鑽している。	B	大学との協働により、他園では見られない豊富な取り組みが展開されています。 自己研修費を活用して保育の質を向上させる努力が行われています。前年同様に個人研修費を効果的に使い、“学びの会”など資質向上に役立てています。研修費があることで学ぶ姿勢が促され、学びたいという意欲が継続しています。		
	15	保育者の体罰や事故、個人情報漏洩等の不祥事根絶のために組織的に取り組んでいる。	B	子どもに不利益を及ぼす行為に対して、保育者は責任を持って相談や報告を行い、個人情報の漏洩にも注意を払っています。 就業規則の周知不足は昨年に引き続き問題となっています。問題が発生した際は、園内外のリソースを活用し組織的に問題解決に取り組んでいます。 使用する携帯や iPad などの取り扱いにも責任を持っています。職員間での情報共有が速やかに行うことに課題があります。		

教育環境	16	安全・安心で温かい教育環境整備に努めている。	B	温かい環境づくりに取り組み、定期的に環境構成を見直しています。子どもの発達に合った玩具を保育室内に配置し、子どもが自分で選べる環境を心がけています。ホールの環境設定には課題があります。		
	17	事故防止のためのガイドラインを遵守し、ヒヤリハットをはじめ事故防止を最優先に考慮した取り組みをしている。	C	ヒヤリハットの記録と周知には当初積極的に取り組んでいましたが、時間が経つにつれて意識が薄れ、行事や業務が増えると報告が疎かになりました。 地震を経験し、保育中の安全対策について改善が必要な場所があることが明らかになり、安全で快適な環境の整備に更なる努力が求められます。		
	18	特別支援教育体制の充実をするために特別教育支援コーディネーターの指名、園内員会の設置により、個別の計画に即した保育を展開している。	B	組織的に保育 MT（ミーティング）を実施し、他クラスとの意見交換や専門的な知見の学習が行われています。しかし、個別の指導計画は、職員全体の理解や周知が不足しており、工夫が求められます。保育 MT は、大学教員からの視点を学び、より良い保育を考える有意義な場となっています。		
家庭・地域との連携	19	開かれた園作りを目指し、家庭・地域社会に積極的に情報提供を行っている。	C	こども園が地域社会の資源としてどのように機能すべきかは、今後も職員間で継続して議論する重要なテーマです。 ホームページの更新不足により、園の特色を外部に伝える機会が失われています。感染症の影響が薄れたことで保育体験などの活動を再開でき、地域との関わりを強化したいと考えていますが、地域への発信はまだ弱いと感じられます。夏祭りでの地域交流や年齢別の懇談会を通じて、家庭への情報提供が向上したと思われます。		

	20	家庭・地域社会と連携、協力し、より安全で豊かな教育活動を目指している。	B	感染症の影響で中断されていた地域交流を再開し地域との関わりを強化する必要があります。 ICT の活用により、子どもの様子を写真や動画で伝える機会が増え、送迎時やコミュニケーションアプリを通じて家庭との連携を深めています。		
	21	幼小連携教育の視点にたった教育活動を推進するために、小学校との連携を具体的に図っている。	C	年長児が小学校を知る機会を設けるために小学校見学を行い、伝達会議などを通じて小学校と積極的に連携を図っています。 前年度に比べ、小学校との連携が増えており、情報交換会や小学校への散歩などを通して実現されました。西区で開催された研修を通じても連携の機会が得られたと感じています。 架け橋期の計画は立案されていません。		
	22	保護者と子どもの育ちを共有するために保護者の実情に相応しい子育て支援の在り方を追求している。	B	保護者と子どもの育ちを共有するために、お便りやドキュメンテーションを活用しています。感染症が落ち着いたことで、保育体験や懇談会を再開し、保護者が園内で子どもの様子を見る機会を増やしました。 ICT の導入により、クラスや子どもの活動を写真で配信し、園の様子をより伝え、開かれた保育を実現しています。送迎時の対話を通じて保護者との信頼関係を築くことにも努めており、園の遊びが子どもの学びにつながっていることを発信しています。 保護者に対する ICT 導入の評価が必要です。		